

B-157 福島県喜多方地区における衣生活の史的研究(第8報)

諸帳筈からみた呉服商S家の商法と住民の
衣生活について—明治後期を対象として—

聖和学園短大○石川妙子 雁部愛
県立米沢女短大 徳永 幾久
郡山女大家政 関口富子 山馬寿子 佐原 吳

目的 販売者側からの資料による衣生活の史的研究の一環として、前回まで小売帳筈及び卸売帳による考察を行ってきた。今回は仕入帳によつて当時の商品流通の実態をとらえ併せて前回までのS家の商法及び住民の衣生活についての考察をさらに深めようとした。

方法 対象は前回と同じ明治後期とし、明治41年の他邦仕入帳・出先仕入帳を中心に、萬控帳・金銭出入帳を分析し、関係文献、聴取り等を参考に考察した。

結果 1. S家の仕入先は、地元製品を喜多方周辺で仕入れる他は、他地方の問屋からの仕入れである。他邦仕入帳記載店数は約70店で、50余店は東京市内の店であった。2. 仕入方法は見本による注文仕入れと春秋2回の出京買付で、綿ネル・裏地・手拭等は前者、呉服物等は後者である。3. 仕入商品中遠州物・越後物は、浜松・新潟より仕入れたが、上方物については東京の問屋から仕入れていた。商品の輸送は小包、客車便、運送店を通じての貨物輸送である。4. 綿ネル・手拭等は少数店より多量に仕入れるが、洋服地は数店より1~2着分をその都度取寄せていた。既製品はメリヤス下着類が主であるが、セーター等も少量あった。古着類は高級物に限られている。

以上の結果により、明治後期の喜多方地区が鉄道の開通によつて東京と結ばれ、東京の問屋の商圏内に入っていた実態及びS家がその積極的な商法により次第に問屋的性格を強めていった過程を知ることが出来た。さらに当時の住民の衣生活において、古着の利用が日常着から高級物に移り、次第に他地方産の衣料の利用が多くなる等、衣生活の変容の過程を仕入れの面からも考察することが出来た。